

A-3

入学後半年間に見られる一年生の英語力の推移について

On the Shift of English Proficiency of First Year Students during the Past Half Year

○乙黒麻記子¹, 谷岡朗¹, 鈴木孝¹, ジョセフ・ファラウト¹, ルート・ヴァンバーレン¹,
 中村文紀¹, 多恵基継¹, ジョナサン・ハリソン¹, 内堀奈保子¹, 秋庭大悟¹
 *Makiko Otoguro¹, Akira Tanioka¹, Takashi Suzuki¹, Joseph Falout¹, Ruth Vanbaelen¹,
 Fuminori Nakamura¹, Mototsugu Tae¹, Jonathan Harrison¹, Naoko Uchibori¹, Daigo Akiba¹

Abstract: Although freshmen have two English classes per week, most find it difficult to maintain their English ability since time devoted to English decreases in university. To make the best use of limited classes, identifying students' weaknesses is crucial. In this study, we chose three classes and conducted the same proficiency test in April and again in September, then compared the results by closely looking at the average percentages for each question. The data reveals that middle and lower level students are more likely to mark different answers for the same questions. It is concluded that improving students' basic abilities with English grammar, especially parts of speech, is crucial to help them comprehend complicated English sentences.

1. はじめに

大学入学後の学生の英語力をいかに向上させるかは、英語が将来的に必要な理工系学生への英語教育において非常に重要な課題の一つである。この問題を解決するために、当グループはここ数年、e-learning をいかに効果的に授業内外で取り入れるかといった研究や¹⁾、moodle や e-mail を用いて学生のやる気を高める方法を模索する研究など²⁾、主体的な学習の質を高める e-learning の利活用に関する研究を行ってきた。受験という山を乗り越えた学生にとって、英語学習に費やす時間は圧倒的に減少するが、限られた時間のなかで学生の英語力を向上させるためには、こうした運用方法の検討に加え、効果的なコンテンツ作成が不可欠となる。本研究では、作成すべきコンテンツの方向性を再検討すべく、1年生の英語力が入学後の半年間でどのように変化したか、分析・検証を行う。

2. 方法と結果

本学部では1年次の英語 IA/IB, IIA/IIB の合計4科目(各1単位)を必修としており、4月のプレースメントテストによってクラス分けが行われる。当該学年では、理工系学生に必要な基礎的英語力の養成が主眼となるが、週2回という限られた時間のなかで、すべての既習事項を逐一確認することは時間的に難しく、また多すぎる宿題を課すことも学生の負担が大きくなり逆効果である。そのため、学習内容の絞込みを行うことは、初年次英語教育にとって非常に大切な課題である。

今回の分析では、プレースメントテストと同一の問題(抜粋)を後期の初回授業で改めて出題し、入学直後との変化について考察を行った。対象としたのは各レベル・学科から無作為に抽出した全5クラス、合計218名である。

全体的に、前後の文脈から単語の意味を類推する能力は概ね身につけており、受験等で比較的頻出とされる文法項目については正答率が高い傾向にあった。その一方で、品詞の理解を問う問題に正答率が低いものが目立ったのが非常に懸念される。学生たちは、今後、英語でマニュアルや論文を読み、執筆する機会が多くなると推察されるが、常に教員やアドバイザー役が横にいるわけではない。そこで最も頼りとなるのは辞書となるが、膨大な情報量から適切な情報を引き出すにあたっては、品詞に対する理解が必要不可欠である。

こうした状況をふまえ、本稿では、品詞の理解に焦点を絞り、考察を行うこととした。

3. 考察

Table 1 は、品詞に関する5題について、4月のプレースメントテスト(以下 PRE)と後期に行った解き直し(以下 POST)の正答率の増減を示したものである。問 C については極わずかに減少しているが、全体としては改善されてい

1 : 日大理工・教員・一般

るように見受けられる。しかし、Figure 1 にみられるように、正答率そのものを重ねて考えると、PRE で正答率が低い問題は POST でも変わらず低く、解けている問題と解けていない問題が明確に分かれていることが分かる。すなわち、総体的には、学生の苦手意識や不得手な項目には、改善がみられないことが明らかとなった。

しかし、ここでひとつ疑念が残るのは、PRE で正解していた学生が、どの程度の理解をもって正答を導くことができたかということである。PRE と POST とともに正解できた学生こそ、当該单元について安定的に理解していると推察されるが、この点について、もう少し詳しく検証してみたい。

Figure 2 は、各問題ごとに、PRE/POST の 2 回でともに正解できた学生の割合をクラス別に示したものである。クラスレベルは、4 月のブレースメントテストの平均点順とし、数字が小さい方が高く、クラス 5 が最も平均点が低い。全体的な傾向としては、クラスレベルの高いクラスの方が両問正解の割合がいずれの問題においても高く、おおむね安定した学力があると推察される。しかしながら、問 C において、クラス 1 が下位のクラスとほぼ変わらない結果となっている。本問は friendly の品詞を問う問題であるが、学習経験の多い上位レベルの学生は、語尾による先入観に惑わされた可能性があることがうかがえ、やはり品詞やその機能に対する理解が磐石であるとは言い難い。また、中間から下位の 3 クラスについては、両問正答率がさほど高くないだけでなく、問 B および問 E で順位が逆転していることから、不安定な理解や勘によって回答を選択している可能性がたぶん疑われる。

4. 結論

前述のように、品詞とその働きは、英語の学習において大変重要な概念である。これらの理解があいまいであると、実際に英文を読んだり聞いたりする際に、正しく文意を理解できなくなるため、「なんとなく」「あやふや」なまま、流れてしまいがちになる。これは細かい英文法よりもコミュニケーション能力が重視されるようになった近年の中学・高校での英語教育の問題点であることは常々指摘されてきたが、今回の試みでもそのことが再度明らかになった。しかし本研究は、決してかつての暗記に大きく依存する英語学習を全面的に肯定しているものでもない。暗記を通して修得した知識は、いうなれば 1 対 1 の関係性に終わってしまい、おおよそ応用の利かない不安定なものになってしまうことが多い。これは、今回の上位クラスの結果から危惧されることのひとつでもある。そうした意味でも、学習者の理解状況や特性を正確に捉え、その情報をもとにしたフィードバック型の e-learning コンテンツの作成は、学習者一人ひとりにとって有益なツールになると期待できるのである。

5. 参考文献

- [1] 中村文紀, 谷岡朗, 鈴木孝, 多恵基継, 乙黒麻記子, 山口健: 「e-learning を利用した英語学習サポートシステムの効果測定」, 第 55 回日本大学理工学部学術講演会 (CD-ROM), 71-72, 2011.
- [2] 内堀奈保子, 谷岡朗, 鈴木孝, 多恵基継, ジョセフ・ファラウト, ルート・ヴァンバーレン, 中村文紀, ジョナサン・ハリソン, 乙黒麻記子: 「電子メールサポートを利用した e-learning の活用—2012 年度「TOEIC 短期攻略講座」の成果から」, 第 56 回日本大学理工学部学術講演会 (CD-ROM), 7-8, 2014.

問 A	問 B	問 C	問 D	問 E
6.0%	1.8%	-0.5%	1.8%	3.2%

Table 1: 正答率の増減

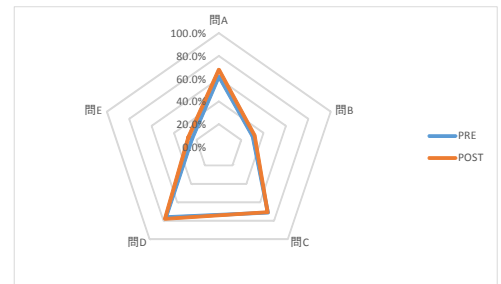


Figure 1: 各問題の正答率

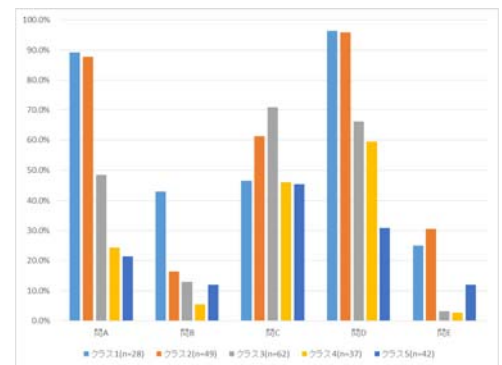


Figure 2: 両問正解の割合 (クラス別)